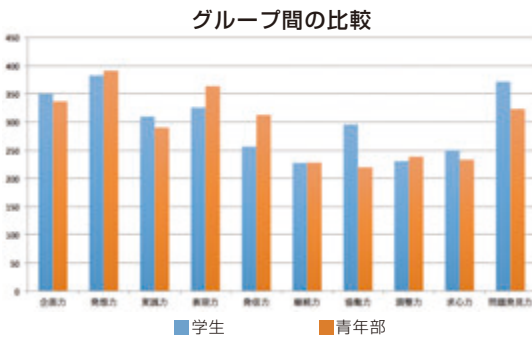


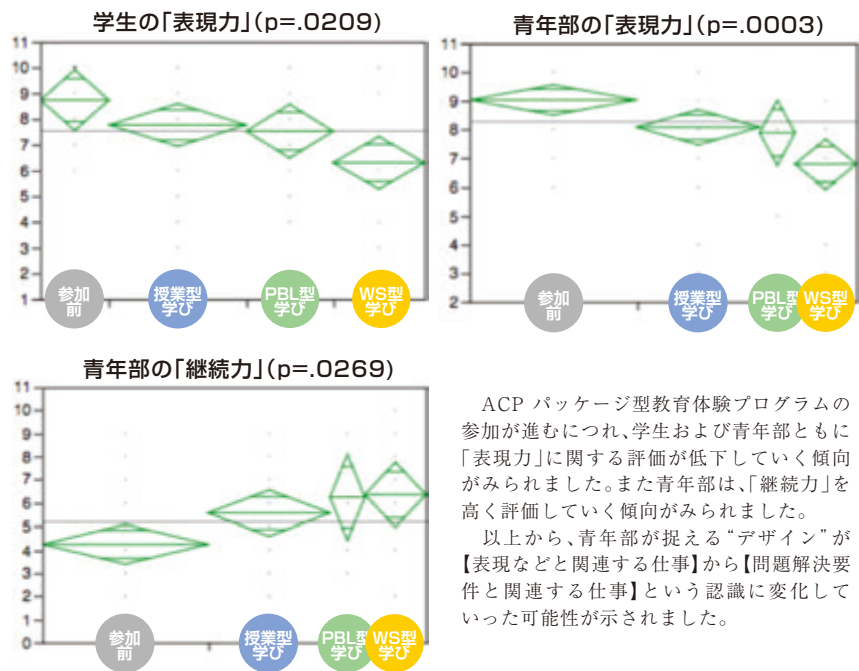
平成28年度の成果のまとめ

分析結果 (一部抜粋)

「教育効果の質的向上」を明らかにすることを目的に、異なる手法の教育プログラムの受講前後に実施したアンケート結果を分析しました。



学生、青年部の両グループともに「発想力」を重視する傾向が確認され、両者の差として【青年部は学生より、「表現力」、「発想力」を重視する】【学生は青年部より、「協働力」、「問題発見力」を重視する】という傾向が明らかとなりました。



ACP パッケージ型教育体験プログラムの参加が進むにつれ、学生および青年部ともに「表現力」に関する評価が低下していく傾向がみられました。また青年部は、「継続力」を高く評価していく傾向がみられました。以上から、青年部が捉える「デザイン」が【表現などと関連する仕事】から【問題解決要件と関連する仕事】という認識に変化していった可能性が示されました。

地域の魅力調査手法の検討【GPSロガーの設計】



観光による地域創生を行う上で、例えば「観光客の感動」や「観光地が有する魅力」に関するデータの収集が、地域そのものの評価や、地域創生活動の成果を客観的に検証する際に重要となります。

そこで、GPS内蔵のロガー（行動記録装置）を設計、開発しました。このGPSロガーでは、GPSにより移動軌跡を記録することが可能となります。また、観光客の興味度を計測するため、興味度ボタン（興味がある～無いまでの3段階に対応する3つのボタン）を搭載しました。

前述のフィールドワークでは、本GPSロガーを参加者が携帯し、データの取得を行いました。



実験データの分析は来年度に実施予定ですが、使用した結果、本機の活用の際には、GPSシステムそのものの問題等も原因となりますが、以下の課題が明らかとなりました。

- 1) 屋根の有る場所(室内、トンネル内等)ではデータを取得できない
- 2) 高揚時は興味度ボタンを押し忘れる
- 3) 興味度ボタンの重複押し理由をどのように解釈するかが検討事項となりました。

本年度の活動で得られた知見

PBL型学習 WS型学習

■デザイン学の方法論の地域創生活動への適用に関して

【カスタマージャーニーマップ】と【プロトタイピング】を用いた手法が以下の点で効果的でした。

- ・カスタマージャーニーマップにより、言語以上の意見の共有が可能となる
- ・プロトタイピングに慣れている学生参加を前提とすると、地域の人のアイデアが膨らみやすくなる

■ワークショップでの役割分担に関して

【プロトタイピング】と【プレゼン資料作成等のプロトタイピング以外のアウトプット】といった役割を、明確に分けるグループと分けないグループの活動が観察されました。前者のプロトタイプの完成度は高く、後者のコミュニケーションは活発なものでした。以上から以下の知見を得ました。

- ・コミュニケーションを重要視する際には、役割分担を不明確にする
- ・提案の完成度を上げることを重要視する際には、役割分担を明確にする

■過疎市町村の自律的創生【地域の方の自律】に関する知見

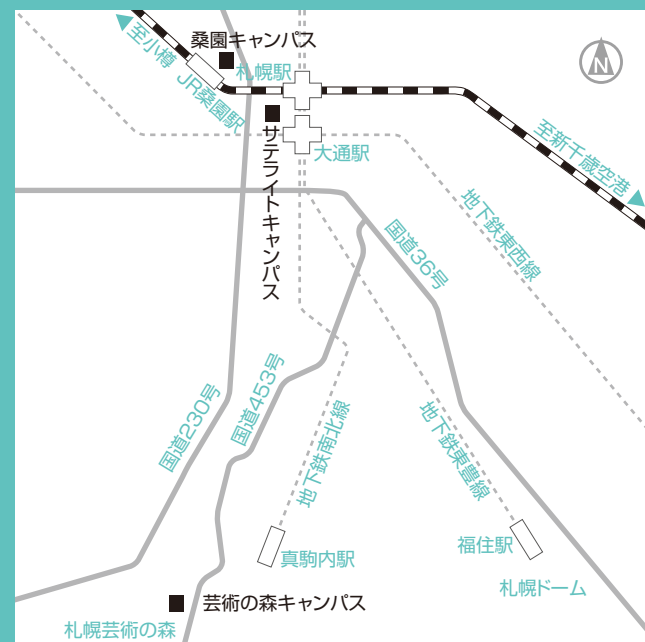
学生はワークショップに慣れているためアイデアを多く出せましたが、地域の方が学生の意見を待っている状況が観察されました。また、グループ内の複数の立場に共通理解のある橋渡し役の重要性が明らかとなりました。本研究の活動は「地域の方の自律」をめざすことが目的です。そこで、以下の知見を本年度の成果としました。

- ・地域の方が「これなら自分でもできる」と思える方法論の開発が必要
- ・地域の方のアイデアを引き出す、ゲーム感覚での強制発想法の開発が必要
- ・個人での発想時間、グループでの共有時間など、発散思考と収束思考の切り換えを明確化した設計が必要

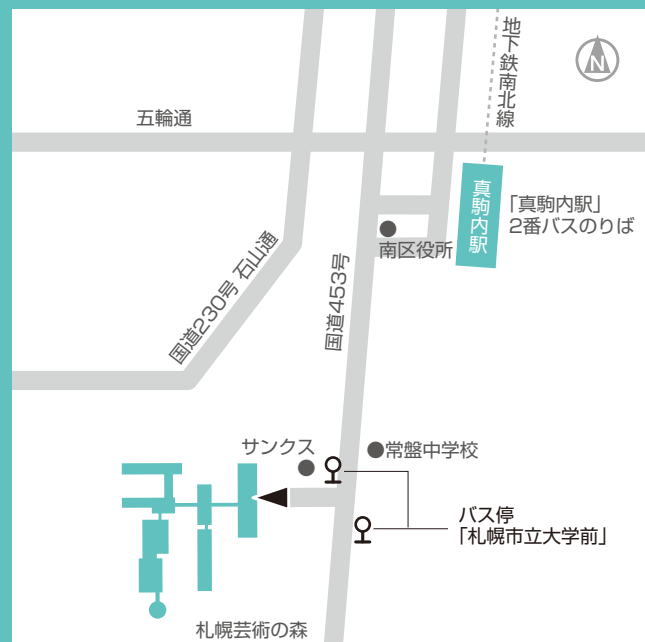
研究フィールド

全国で5番目の人口を有する北海道最大の都市「札幌市」の南区に札幌市立大学デザイン学部の芸術の森キャンパスがあります。本研究はこの芸術の森キャンパスを中心に研究教育活動を実施し

ていますが、本年度は特に、有珠郡壮瞥町をフィールドにACP仮説を検証する活動を実施しました。また、道南から青森に至る青函圏にまで調査範囲を広げ調査活動を行いました。



札幌市内



芸術の森キャンパス



札幌市立大学 SAPPORO CITY UNIVERSITY

大学本部・デザイン学部・デザイン研究科
〒005-0864 札幌市南区芸術の森1丁目
TEL:011-592-2300(代表) FAX:011-592-2369
URL:www.scu.ac.jp

【本研究に関するお問い合わせ】
公立大学法人 札幌市立大学 地域連携課交付 ACP事務局

〒005-0864 札幌市南区芸術の森1丁目
TEL:011-592-2574(直通) TEL:011-592-2300(代表)
E-MAIL:acp@scu.ac.jp



日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(A) 研究課題番号:16H01803

「拡張キャンパス型地域連携」による 過疎市町村の自律的創生デザイン研究

研究代表者: 蓮見孝(札幌市立大学 デザイン学部 教授)

2016 report



札幌市立大学 SAPPORO CITY UNIVERSITY

研究概要と平成28年度の「パッケージ型教育体験プログラム」実験

*各種、教育手法の教育効果の違いの検証を目的としたパッケージ型の教育体験プログラム

研究概要

本研究は、大学の機能や効用を活かした「拡張キャンパス型地域連携プログラム（以下ACPと略記）」により、大都市の持つ資源やパワーを周辺過疎市町村に効果的に適用させるしくみづくりをめざすものです。周辺過疎市町村の自律的な活性化を促し、同時に大学における教育効果を高めるためには、どのような課題を解決し、どのようなプロセスを経るべきかを、ACPの実証実験により明らかにします。

研究対象フィールドは北海道地域とし、大都市として札幌市、周辺過疎市町村として有珠郡壮瞥町を取り上げます。具体的には札幌市内に立地する札幌市立大学とその連携関係にある大学、そして壮瞥町とその周辺市町の住民や産業界の連携によるACPの運用を通して、若年層を中心とした連携地域間の人的交流の促進、地域産業の活性化、住民のウェルネス向上を図ります。

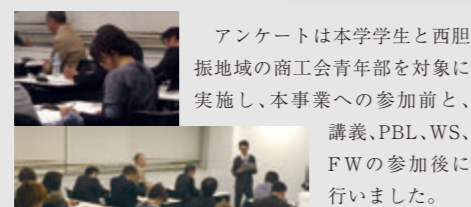
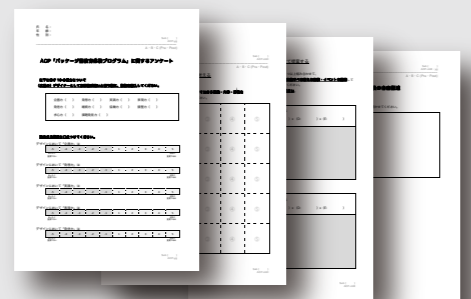
本研究で得られる成果は、札幌市立大学がめざす「地域創生デザイン学」の方法論の確立と体系化に活かします。



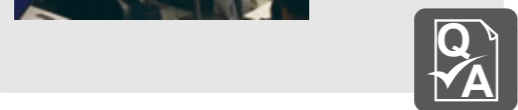
アンケートの設計

本研究は「教育効果の質的向上」を明らかにすることを旨とし、講義、PBL、WSやFW受講者の意識変化を定量的に捉えることを目的として、アンケートを設計しました。

具体的には、【デザイン】に対する考え方がどのように変化するかを明らかにすることを目的とした「企画力」「創造力」「表現力」などのデザイナーにとって必要性が高いと思われる能力10項目を評価する要素と、「知識量」「発想力」の向上度合いを明らかにすることを目的にした要素と、自由記述からなるものとしました。



アンケートは本学学生と西胆振地域の商工会青年部を対象に実施し、本事業への参加前と、講義、PBL、WS、FWの参加後に行いました。



授業型学び

知識を増すことを目的とした「受動的」学び
講師1名がスライド等を用いて口頭で講義を行い受講生複数名が個々に聴講しました。「理解力」が求められる学びと定義しました。

第1回
【拡張キャンパス型地域連携】
【酒井 正幸 特任教授】

受講生：壮瞥町商工会青年部4名、札幌市立大学学生4名
(20161007 @ 芸術の森キャンパス)

具体的には、「デザインと地域創生」と題し、デザイン学の方法論を地域創生にどのように活かすことができるのか、また本研究の前身である「タイム・スペースシェアリング型地域連携による地域創成デザイン研究」で明らかになった知見等について学びました。

第2回
【いわゆるデザインの基本】
【柿山 浩一郎 准教授】

受講生：壮瞥町商工会青年部18名
(20161014 @ 壮瞥町商工会 会議室)
受講生：札幌市立大学学生6名
(20161021 @ 芸術の森キャンパス)

地域でビジネスを行う際の「印刷物のデザイン(グラフィックデザイン)の基礎」、と「情報関連のデザイン(Webデザイン)の基礎」を、本学が実施した具体的なデザイン事例を通して、デザインの領域の広さを学びました。



第3回
【地域創生デザイン概論】
【蓮見 孝 教授】

受講生：壮瞥町商工会青年部8名、札幌市立大学学生14名
(20161021 @ サテライトキャンパス)

具体的な地域創生の成功事例を通して、「多様化」「こだわり」「自己投資型消費」の時代であることを学び、「人・コト・場・もの・あゆみ」がミックスされたプログラムのデザインと実践の重要性を学びました。



PBL型学び

PBL : Project Based Learning
課題設定、検討のプロセスや表現手法が明示される学び
講師2名が運営役(コーディネータ)となり、受講生は、4名程度×3グループとなり提案しました。「課題解決能力」が求められる学びと定義しました。

＜「サービスデザイン」を用いたお土産のデザイン＞
【上田 裕文 准教授(北海道大学)、片山 めぐみ 講師】

受講生：壮瞥町商工会青年部5名、札幌市立大学学生10名
(20161116～1118 @ サテライトキャンパス)

教育プログラムBでは5つのステップを経て、サービスデザインにおける課題解決手法を学ぶ場となりました。

【Step 1】 Emphasize (共感)

自分自身の体験から顧客(ターゲット)を知るため、グループ単位で自己紹介を行いながら自分が体験したお土産のストーリーの共有を行いました。その後カスタマージャーニーマップ(顧客の一連の体験をステージとしてグループ化し、時間の経過に対する感情の変化をグラフにした表)を用いて体験事例をまとめました。



お土産ストーリーの共有

【Step2】 Define (定義)

作成したカスタマージャーニーマップを元に、嬉しい体験に繋がるポイントや改善できるポイントの整理・抽出を行い、提案すべきお土産の条件を定義しました。また、これらのお土産体験のケースをグループごとにまとめて発表しました。



カスタマージャーニーマップを使った発表

【Step3】 Ideate (創造)

あらかじめ設定されていたシナリオ(具体的な顧客像や顧客が贈りたいお土産についてのシナリオ)を元にアイデアを出し合い、4コマ漫画を使って提案するお土産のストーリーを作成しました。また、ストーリーに沿った贈る側と贈られる側の2軸からなるカスタマージャーニーマップを作成しました。



提案するお土産のストーリー例

【Step4】 Prototype (試作)

事前に用意した紙などの材料を用いてお土産の体験がイメージできるお土産のプロトタイプを作成しました。



プロトタイプの作成(1)



プロトタイプの作成(2)

【Step5】 Test (検証)

お土産のプロトタイプを用いて一連のストーリーをグループごとにアクティビングアウト(寸劇)として再現しました。また、グループ間で一部の人を交換し、提案のフィードバックを行う「ウォークスルー評価」を実施後、ストーリーやプロトタイプを改善し、最終発表を行いました。



ウォークスルー評価

参考文献

①スタンフォード大学 デザインスクール
https://designthinking.or.jp/

②一般社団法人 デザイン思考研究所
https://designthinking.or.jp/

WS : Workshop

課題設定、検討プロセスや表現手法が明示されない学び
講師1名と補助教員が運営役(コーディネータ)となり受講生は、5名程度×2グループとなり提案しました。「課題発見能力」が求められる学びと定義しました。

＜壮瞥町を訪れる観光客に提供する「体験型ツーリズム(WS)」の提案＞ 【矢久保 空運 助教】

受講生：壮瞥町商工会青年部8名、札幌市立大学学生10名
(20161202～1204 @ 壮瞥町内)

壮瞥町を訪れた観光客を対象者と設定し「壮瞥町を体験するツーリズムワークショップ」を提案するテーマとしました。

具体的な提案要素としては、人数規模/実施場所/実施内容/広報方法/必要機材/予算案、等とし「QRコードを用いた情報コミュニケーションを含む」という条件を制限として設けました。



【1日目】移動(前泊)

芸術の森キャンパスを出発し壮瞥町に移動しました(写真1)。

【2日目】ワークショップ1

ガイダンスを実施し、提案内容の検討を目的にグループ別に壮瞥町・西胆振地域を対象としたフィールドサーベイを実施しました(写真2)。

ワークショップ2

フィールドサーベイを通してどのような内容を提案するか、グループ内でのディスカッションしました(写真3)。

【3日目】発表資料作成

前日の検討を通して得た知見をもとに、調査内容、提案内容を発表する資料作成を行いました(写真4)。

成果発表会

壮瞥町の「そらべつ情報館」2階研修室にて、成果報告会を実施しました(写真5)。



FW : Field Work

観察を体感とともに行う「能動的」学び
教員3名と補助教員が引率役(コーディネータ)となり、受講生は、5名程度×3グループとなり調査しました。「情報収集能力」が求められる学びと定義しました。

＜「環津軽海峡パートナーシップ」フィールドワーク＞ 【酒井 正幸 特任教授、金 秀敏 講師、矢久保 空運 助教】

受講生：壮瞥町商工会青年部3名、札幌市立大学学生8名
(20170227～0301 @ 北海道道南～青森県)

「環津軽海峡パートナーシップ」フィールドワークの調査対象は、地域住民らによる内発的な動きで活性化事業が生まれた事例とし、その経緯、現状、課題について調査することで、過疎市町村が自律的に活性化するプロセスをデザイン方法論に基づき体系化し、ACPによる「地域創生デザイン学」の仮説的セオリーとの類似性や差異を明らかにすることを目的としました。

【1日目】

道南いさりび鉄道本社(函館市)を訪問しました。道南いさりび鉄道(写真6)は北海道新幹線開業に伴いJRの一部路線を第三セクターによる経営形態に変更し再生を図った鉄道で(2016年開業)、沿線住民によるさまざまな地域創生活動が行われていました。

本社訪問後は2チームに分かれ北斗市と木古内町における事例(写真7)の調査を行いました。



【2日目】
新幹線で青森県に入り、五所川原市へ移動後、3チームに分かれて同地域での地域創生活動を調査しました。地域資源を活用した加工食品やメニュー開発を行い、コミュニティカフェを運営する企業組合で、その活動事例や、地域の雇用創出を目的に作ったかなぎ元気倶楽部の事例(写真9)、立後武多(たちねぶた)の再興により地域活性化を図った事例等(写真8)を調査しました。その後青森市へ移動し、GPSロガーによるデータ収集を実施しました。

【3日目】

青森市内にて、青森県庁が進めている津軽海峡エリア(青森県、北海道道南地域)連携による活性化への取り組み事例「λ(ラムダ)プロジェクト」を調査しました。その後、市内でGPSロガーによるデータ収集を実施しました。

